

高等学校国語教育の光を求めて

―現代文の実践から「読む」、「書く」、「調べる」について―

稲井 一雄

初めに

これは現代文の小説単元の授業から出発した一連の研究である。

その流れは大体、次の通りである。

(1) 日本教育実践学会第5回京都大会の発表(二〇〇二年)

「現代文の授業を通じた研究方法の模索…学習者の取りがちな誤謬と抽象的思考の問題(前任校における問題の発見、勤務校における問題点の追求と分析と考察、研究方法の模索)」

(2) 第4回徳島国語教育実践研究大会の発表(二〇〇三年)

「高等学校における小説の学習指導…井上ひさし作『ナイン』を取り上げて(昨年度と一昨年度との比較分析と考察、問題点の拡大)」

(3) 日本教育実践学会第6回岡山大会の発表(二〇〇三年)

「データとの相互作用による教育技術の向上と理論の発見…国語の発展的学習指導を通して(昨年度と一昨年度との比較分析と考察、評価、フィードバックの開発、研究方法の確定)」
以上である。

本誌では、これまでの研究結果から、「読む」、「書く」、「調べる」といった国語学習の問題点と解決の道を取り上げてみたいと思う。

―前任校の指導から(研究のきっかけ)

3年前、前任校(鳴門第一高校)の国際教養科の3年生に、井上ひさし作『ナイン』の本文に即して設問を投げかけ、グループ学習をさせた。その活動中、生徒たちの発言や記述の中で、この研究のきっかけとなった問題に遭遇した。

同単元の学習の終わりが、
「新道商店街の様子と今の違いを答えなさい。」という設問を出して、グループ別に解決させていたときのことである。

「新道」とは、小説中の東京都新宿区四谷一丁目の新道商店街である。そして、「昔の新道」は、商店主のみならず、会社勤めのサラリーマンも住んでいて、住民たちの日用品や食料などは十分そこでも買え、生活感があり、人情味があったが、「今の新道」は、周囲

に大会社のビルが立ち並び、J大学の学生が増え、住民たちはどこかへ引越してしまい、以前の商店は、ワイシャツ店と畳店ぐらいになってしまい、外部からの客を当てにするという、そつけない飲食店街に様変わりしていた。小説ではそんなふうになっている。

ある班のとりまとめの中に、「新道が昔は古ぼけた商店街だったけど、今は社会的になっている。昔は親近感があった。今は、そつけない。近代西洋化している。自営業から雇われ職業に変わっている。」というのがあった。「昔は古ぼけた」とか、「今は社会的」とか、「近代西洋化」とか答えている。しかも「近代西洋化」はごく最近（七〇年代から八〇年代）のことであるかのようなのである。抽象的用語を使用している点は評価しなければならぬけれども、今の飲食店の並んだ繁華街を「社会的」、「近代西洋化」と表現し、昔の商店街を「古ぼけた」と考えるのは問題である。あいまいで不適格な抽象表現、イメージ、もしくは歴史観を持った例である。

また、別な班の取りまとめでは、「活気にみちあふれていた人々の努力によってあたりまえの安定した生活をおくれるようになったが、今は、その活気もうしなわれつつある。」「（その）は「従来の商店街の」であろう。」という箇所があった。「安定した生活」が「あたりまえ」であるというのが問題である。生活習慣的スタンスからくる思い違いであろう。

そこで「近代西洋化」「社会的」など、用語的的確な使用について全体に注意を促した後、最終的に個々の意見を確認したところ、か

えって問題が波及したのか、同様に抽象表現、歴史観、イメージ、ものの見方、考え方に問題を持つ者が29人中17人（58・6％）いた。

新道の今の飲食店街が「近代化」・「西洋近代化」されていると述べたものが5例、同じく今の飲食店街を「社会的」と述べたものが2例、同じく今の飲食店街を「あたりまえ」・「普通」と述べたものが2例、昔の商店街を「ふるぼけた」と述べたものが5例あった。さらに、今は「豊か」であるとした考えや表現が3例あった。「豊かさ」は、物質的な面だけではなく、精神的な面や社会共有財産・社会福祉の面からも考えなければならない問題であり、昔だから貧しかったわけでもない。価値観に関する問題である。

こうした事象は、一つの班の偏見が波及したものもあるが、要するに、学習者の生活習慣的スタンスからくるものの見方、考え方、イメージではないか。また、そこには対比的思考の問題もある。

小説の主人公「わたし」が回想した新道商店街の「昔」（ちょうど東京オリンピックの頃）が、現代の学習者にとって遠い過去に思えたふしがある。生徒たちは八三年、八四年の生まれである。

そこで、そうした問題について再び全体的に是正指導した。しかし、問題はそれで終わらなかった。

「なぜ地価が高騰し、なぜナインの親は商売をやめたか。」という設問で、さらに問いかけてみた。前述の「近代西洋化」「社会的」といった解答を最初に出したグループの話し合いの記述に、「産業革命が起こり、会社がビルを多く建てられるようになって、土地の需要

が増えたから。」と答えていた。是正指導後も、高度経済成長期に「産業革命」が起こったと考えていた学習者が存在していたのである。

この誤謬は、「産業革命」という語そのものに歴史的認識がなく、戦後の技術革新をあいまいに抽象表現したのであろう。

その他の学習者にそうした誤謬例が見られなかったが、その設問に答えられず、白紙が多かったためである。

小説中の東京都新宿区四谷新道商店街の今昔を比較させるという時間的空間的な課題を与えると、学習者の生活習慣的スタンスから来る不適格な抽象表現や歴史観や価値観やイメージが存在する。また、特有の思考様式が働いているのではないか。その点をもっと追求してみる必要がある。これが私の研究のきっかけである。

II 勤務校での指導から

幸い、勤務校が変わっても同じ作品が扱えた。一昨年度の指導対象は、3年生生理系2クラス（クラスAとクラスB）で、単位数は2単位であった。昨年度の指導対象は、3年生生理系1クラス（クラスC）、文系1クラス（クラスD）で、単位数はそれぞれ2単位、3単位であった。

1 生徒の実態と研究方法

前任校3年生の国際教養コースは、現在県の学科再編で廃止されてしまったが、学習形態の可能性から見て悪くないコースであった。

英語科の担任教師のしつけが行き届き、特にグループに分かれて話し合いをする活動がごく自然に行えた。しかし、今の勤務校は大学進学率では県下の学校で引けを取らないが、教師間の進行の申し合わせやシラバスに従い、大学進身体制や生徒の塾通いによるゆとりのなさなどから、調べごとをさせたり、グループ毎に話し合いをさせたり、生徒とコミュニケーションを図りながら授業を進行させたりすることが困難で、指導はどうしても画一的な一斉指導にならざるをえない。そこで、生徒に質問を発して解答を小紙に書かせ、回収して生徒の理解状況をつかみながら授業を進めるというやり方を取った。その点についての一連の分析もあるが、ここでは省略する。

さて、前任校から持ち越した問題点をさらに追及するために、一学期末考査への組み込みの形で、一昨年度と昨年度と同設問を課して小論文を書かせてみた。考査組み込みでなければ、生徒たちは真剣に書いてくれないと判断したためである。その設問は考査実施前に予告しており、他の客観問題の量を押さえてあるので、制限時間内に書くことができるかと予測した。

その小論文の設問とは、

「新道が、昔の商店街から繁華街へ変遷してきた過程を、時代的な背景や納得のいく理由を具体的に挙げながら、500字程度で論述せよ。」

である。

研究方法であるが、全員の解答作文を読んで、問題ありと判断し

たものすべてを抜き出してテキスト化し、コード化カテゴリー化を図って考察する。また、考察の際、普段の観察、簡単な記録ノート、その他（生徒の書いた小テスト類、担任教師の意見など）なども参考にする。

問題点抽出は、異なる見方をする数人がよいと思うが、実際上不可能であるし、指導者自身の教育技術向上や教育理論創出のための研究であるので、私一人で行える方法を取りたい。

それで、解答作文を幾度も読んで検討し、問題があると思われる箇所を抽出してテキスト化し、コード化、カテゴリー化を図る。そこで一応の結果が出てもさらに確認し、検討中に別な仮説や観点が生じたなら生徒の元の解答に再帰し、問題点を抽出して、分析を繰り返すというふうに、データを付加修正することを厭わない。

方法として、最初から仮説を立ててそれを実証するという方法を取らない。教科指導する教師自らの主観によって問題点を抽出し、考察するのであるから、不十分な分析方法であることが前提になっている。それ故、問題を抽出し、分析し考察する過程で、教師自身の問題意識が広がると、データも付加修正され、問題点がより明らかになってくる。つまり、データとの相互作用によって教師自らも成長し、理論の創出が図られ、自己の指導改善が可能になるという方法である。

2 研究目的

そうした小論文を書かせるには、生徒の側に実施意義が納得されていなければならない。実施意義・目的を次に述べる。

『ナイン』の主題は、激変していった東京都の四谷駅前の新道商店街やその周辺を舞台にして、変わることにない友情の絆がその後のナインの生きる力になっているということである。新道商店街の今昔の様子とナインのそれぞれの消息などは描かれているが、その舞台の様変わり理由は何も述べられていない。十七、八年前に、「わたし」が東京の五輪大会の開かれた年の暮れから三年間、中村書店の二階を借りていたというのが手がかりである。昔の新道には生活があり、商店は住民を相手にしていた。街全体需給のバランスが取れていたが、今では外部の人々を相手にして、四谷でもっともにぎやかな飲食店街に変貌している。したがって、その変貌の理由を日本の高度経済成長期を軸として歴史的経済的に考えるならば、この作品はより臨場感を伴って理解されるであろう。そうした理解目的から動機付けをし、変貌理由を考えさせた。

一方、指導者側の実施目的はこうである。小論文課題に社会的歴史的な問題を絡めると、情報資料を自分なりに理解する能力、理解した事柄を本文の場面に適合させ納得のいく理由を考える能力、社会的歴史的な判断などが要求される。それで、生徒の抱える学習上のさまざまな問題点が露呈するはずである。そこから指導上の改善の道や理論創出の糸口があるのではないかと期待する。

3 一昨年度と昨年度との授業の取り組みの違い

昨年度（平成十五年）は、対象生徒のみならず、授業の取り組みが一昨年度（平成十四年度）と違っている。それが一昨年度のデータとの違いでもあるので、一昨年度と昨年度との授業の取り組みの違いについて次に述べる。

（1）一昨年度の反省点を踏まえる。

一昨年度は、週当たりの授業時数が理系は2時間で少なく、後半部（第4段落以降）をはしょってしまい、指導が偏った。それで、昨年度は、もう一つの別な短編小説の指導時間を割いて、本文読解指導や課題作文のための予備テストなどに当てた。

また、一昨年度は、高度経済成長についての資料を与えたが、その資料は主婦のライフスタイルの変化に焦点を当てたもので、資料をそのまま引用すると、本文の趣旨からはずれが、事実、そうした誤謬が見られた。そこで昨年度は、他の資料を複数与えた。また、文系1クラスは単位数が3単位なので、図書館へ行かせて自発的に別な資料を見つけさせることにした。

（2）課題作文に至るまでの準備とテスト実施状況の違い

一昨年度は、ノートを見させないで考査の制限時間内に書かせた。そのため空疎な解答が多数見られたため、昨年度は、文案を書いたノートをテスト本番に持ち込み、それを見てもよいことにした。期末テストと言っても、ゆとりを持って解答が書き込めるはずである。また、期末テストの実施前に予備テストを行った。本文について

の理解内容をいくつか確認させ、作文課題に対する文案を書かせたのである。その採点結果は期末テスト前に生徒に返却した。

このように、一昨年度と昨年度とはデータの多少の違い、ずれがある。そこから共通点や異なる点が比較でき、さらに新しい事象が発見できるのではないか。

4 分析と結果

（1）テストの概略

まず、一昨年度と昨年度との客観テスト部分の結果、及び作文解答の結果の概略を示す。表1参照。

客観テスト部分の結果は、一昨年度のクラスBのテスト平均が比較的高いが、他の3クラスは学力的に著しい差異はない。昨年度の文系クラスDがやや高くなっているが、単位時間数が1時間多いためである。

昨年度の作文部分は、複数の資料を読ませ、予備テストまで実施して、本番はノートをあらかじめ用意してきてもよいことにしたので、作文平均文字数が著しく伸び、文系のクラスDに至っては制限字数を設けながらも五百字をオーバーしてしまっている。字数オーバーは減点しなかった。一方、理系のクラスCも、平均文字数が制限字数の80%を越えているが、標準偏差で見てもわかるが、個々の文量のばらつきは大きくなっている。

しかしながら、昨年度は、参考文献を読ませたり、予備テストを

したり、ノート持ち込みを許してあったにもかかわらず、表現上の誤謬があいかわらず多く、特に漢字を誤った生徒の人数が一昨年度より2倍程多い。作文に対する取り組みの甘さ、分からない漢字を辞書で調べるという習慣のなさ、いちいち指示しなければ気づかないといったように、様々な解釈ができればよい。

表1 テストの概略

年度	2002年		2003年	
クラス	クラスA	クラスB	クラスC	クラスD
文・理	理系	理系	理系	文系
現代文単位数	2	2	2	3
人数	39	43	42	35
テスト部分平均%	71.7	84.5	66.1	75.4
同標準偏差	8.295	5.807	7.136	6.410
作文平均文字数	261	375	411	519
同%(*500字)	52.2	75	82.3	103.9
同標準偏差	124.148	134.397	174.708	106.473
作文無解答人数	3	3	4	0
言いさし人数	7	1	4	2
言いさし平均文字数	187	110	282	215
同%(*500字)	37.5	22	56.3	23.9
漢字誤り人数	9	12	19	19
同%	23.1	27.9	45.2	54.3

表2 本文解釈の誤謬

クラスC	クラスD
内訳 8例(7人)	内訳 6例(6人)
新道商店街における大会社のビル建設 3例、中村さんが都屋を安く買った理由 1例、生活感があふれた昔の街とにぎやかな今の街との混同 1例、周囲に「大学ができた。1例、高度成長による歌舞伎への影響(屋号に対する誤解を伴う。) 1例 学生が増え、近くに大会社が建ったことで狭い通りになった。 1例	商店街にスーパーやJ大学やゲームセンターなどができた。登場人物についての誤解、その他、本文からそれた内容など。

次に、作文の分析結果を、一昨年と昨年とを比較しつつ数値的(質的研究からすれば意味はないが、一応の目安になる。)に述べる。

(2) 答案分析

学習者のさまざまな誤謬は、3つの観点に大別できた。

ア本文解釈の観点から

一昨年度の本文解釈の誤謬は全体で20人(24・4%)いたのに対して、昨年度は13人(16・9%)である。表2のように、四谷新道商店街に大会社のビル、スーパー、J大学、ゲームセンターなどができたと答えた生徒がいる。周囲に「J大学が建設された」と解釈した者もいる。歌舞伎役者の大和屋の屋号を家屋と解釈し、「消えていくことになる」と答えた者もいた。教科書をちゃんと読んでいない生

徒が十数人存在し、生活習慣やなじみの娯楽から来るイメージが作
用している。

イ社会的歴史的認識の観点から

社会的歴史的な認識の誤謬は、一昨年度の40人(48・8%)に対
して、昨年度も33人(42・9%)であった。

中でも、時代の齟齬や、地価の高騰原因の誤謬が比較的多い。(以
下、表3参照)

表3 社会的歴史的認識の誤謬

	クラス	クラスC (例)	クラスD (例)	計/77人 (例)
カテゴリー				
1 時代の齟齬		5	8	13
2 土地の高騰原因		7	3	10
3 商店街や周囲の建築・建設		5	1	6
4 所得倍増計画と経済成長率の関係		0	3	3
5 所得倍増計画と進学率の関係		1	2	3
6 飲食店街に変えた理由		7	2	9
7 その他		5	0	5
計(例)		30	18	48
同人数		19	14	33

時代の齟齬の内訳は、高度経済成長期の認識のずれ、バブル、低
成長、不況、コンビニ、デイズニールランド、水道の敷設、情報手段
の発達、などといった点である。いずれも学習者の持つイメージの
範囲の狭さから生じている。

地価の高騰原因の誤謬は、単なる高度経済成長という言葉を冠す
ることにより思考停止してしまい、短絡的にそれで地価の高騰原因
としたり、東京が人口増加したこと、その理由のみで地価の高騰
原因としたり、工業の発達や公害が地価の高騰原因であるとして
している。

時代の齟齬、地価の高騰原因の誤りに次いで多かったのは、新道
商店街を飲食店街に変えた理由付けの誤謬である。

飲食店街に変えた理由付けとして、物価の上昇や、後継者がいな
いこと、時代の波に乗りきれなかったこと、学生の増加や会社が「入
ってきたこと、産業構造の変化という一般論を機械的に当てはめた
こと、外食の流行などをそのまま理由としているが、理由付けにな
っていない。

商店街や周囲の建築、建設を述べた誤りは、新道商店街の周囲に、
J大学やさまざまな大学が建設されたこと、商店街にデパート
が建設されたこと、新道はやつとアスファルトが敷かれた(こ
れは時代の齟齬でもある。)としていたりしている誤りである。

その他、国民所得倍増計画と経済成長率や大学進学率との混同、
引用から来るミスなどである。

表4 作文表記上の問題

項目	クラス	クラスC	クラスD	2クラス
		/27人中	/28人中	/55人中
1)不適切用語		19	11	30
2)不適切表現		10	20	30
3)あいまい表現		10	2	12
4)一文の不備		8	10	18
5)同趣旨の繰り返し		6	7	13
6)同語の繰り返し		3	3	6
7)上記、漢字以外の 作文表記上のミス		10	7	17
以上 合計		66(例)	60(例)	126(例)
8)漢字		42例 (19人)	27例 (19人)	69例 (36人)
9)言いざし		4人	2人	6人

以上のように、社会的歴史的な認識の誤謬は、自分の生きる時代や環境の反映であったり、情報資料の理解が不足していたり、資料の記述をそのまま新道商店街の場合に当てはめたり、変遷理由をきちんと考えなかったりしているところから生じている。

ウ作文表記上の観点から

ノートを写して書いたにもかかわらず、作文表記上の誤謬は、昨年度よりはるかに多くなっている。

表現上の誤謬について、全体的にまとめたものが、表4である。

一昨年度は82人中38人、全体の46・3%が作文表記上の誤りを犯したが、昨年度は、77人中55人、全体の71・4%の生徒が誤りを犯している。以下、その内訳を逐次述べる。

不適切用語や不適切表現が、漢字の誤りに次いで多い。不適切用語は30例、不適切表現も30例である。

不適切用語の中で、最も多かったものは、本文の用語を安易に使用する例(14例)である。中でも、「自給自足」という語(10例)で、新道商店街の内で需要と供給のバランスが取れている状態を意味している。しかし、本文のように納得させた上で使用するのはいいが、納得させることなく安易に使用していた。一昨年も10例あった。そうした本文の用語から来る安易な使用は、他に「自信」「厚化粧」という用語使用例が少ないけれども存在する。本文で擬人法として使用したものを安易に使用した誤謬である。(表5)

不適切表現も同様に多い。不適切表現とは、類似する2つの物事を区別しえないで混同し、合わない表現を取ってしまうミスである。

(表6)

あいまい表現、あいまい用語による例があり、一昨年度19例であったが、あいかわらず12例ある。

あいまい表現とは、説明の必要があるにも関わらず、「あらゆるものこと」、「さまざま」、「いろんな」「その時にふさわしいごく一般的な」など、具体的な説明を避けてしまう例や、「時代」、「時代の流れ」、「高度経済成長」などの語を伴うことによる(あるいは、冠することによる)理由・要因の欠如などで、どれも相手に判断・理解を強いてしまう表現である。これも昨年と同じ傾向である。(表7)不完全な一文になっている文法的なミスで、一文内でなんらかの

表5 不適切用語

クラスC 19例	クラスD 11例
本文の不適切引用 11 例、接続語 2例、作中人物と作者・筆者の区別 2 例、社会的歴史的認識の欠如 1例、その他 3例	呼称 2例、引用語の使用 3例、作中人物と作者の区別 1例、接尾語による熟語化 1例、修飾語句の欠如 1例、社会的歴史的用語 1例、熟語化 2例

表6 不適切表現

クラスC 10例	クラスD 20例
二つの物事を区別しないで混同する表現ミス8例認める。不特定の位置、人の物的表現、娯楽と生活必需品、店と販売物、「普及」と「流行」、名詞と動詞、人と建物、位置の違いを混同、その他	二つの物事が区別しないで混同することによる表現ミスがほとんど。数えられないものを数える、「人々の暮らし」と「街」、組織と人、人と物、「店をはしごする」、「進行」と「推移」（空間系）列と時間系列）、「後」と「跡」、個人的なものと全体的なもの、産業と進学率、偏差値と予備校・塾、主と従、建物と組織、全体的形容と個人的事情などの混同、その他（目的語や主語に対する不適切な表現、無理な関連付け、引用上のミス）

表7 あいまい表現

クラスC 10例	クラスD 2例
どれも相手に判断・理解を要する表現。「時代」、「時代の流れ」、「高度経済成長」などの語を伴うことによる理由・要因の欠如 7例、具体性を避けた複数表現 2例、ありふれた周知のものとする表現 1例	幅のある表現で、モノ・コト、様々な、など。

構成要素が欠けている例がある。一文内の不備によるもので昨年度は18例である。一昨年度は9例だったので、2倍以上増えている。(表8参照)

同趣旨、同語を繰り返すという冗漫さの例も問題点である。昨年度は19例で、一昨年度の12例より増えている。(表9と表10参照)

漢字以外のその他の表記上のミスは表11に示しておく。
エその他の観点から(作文評価などから)

ほとんどの問題点は三つのカテゴリーに収まってしまいが、作文を個々に評価しようとする、文の内容や構成や展開の仕方を考慮しなければならず、別な観点、カテゴリーからさらに問題点が見えてくる。

作文解答を読んでいると、「対比的思考による誤謬」例が見られた。対比的形式的に表現したために内容を誤ってしまう表現である。一昨年度は14例だったが、昨年度は5例しか確認できなかった。表12を参照。

論理思考上の表現の不備であるが、「高度経済成長」、「時代」などといった言葉が来ることによる理由の欠如が、昨年度のデータ全体で12例ある。一昨年度も14例あった。もうそれで理由になっていると思っている例で、社会的歴史的認識と本文解釈の誤謬、あいまい表現などもある。表13参照。

主に参考資料の引用からくる不自然な論理展開上のミスで、今回新たに考えてみた。「情報資料の内容、自他の論理を新道商店街の場

表10 同語の繰り返し

クラスC 3例	クラスD 3例
二文にわたる同語の繰り返し、一文の中での同語の繰り返し2例	高度経済成長、所得倍増計画などのキーワードや接続語

表8 一文の不備

クラスC 8例	クラスD 10例
一文中の説明要素の欠如(場所、主語、連体修飾語句、助詞、呼応関係、係り受けなど。)	一文中の主語、目的語、連体修飾語句、呼応関係、理由付け、呼応関係の欠如

表11 漢字以外のその他の表記上のミス

クラスC 10例	クラスD 7例
句読点 2例、縦書き横書きの様式、誤字脱字 5例、一字下げ、表記の不統一	一字下げ、送り仮名、助詞、脱字

表9 同趣旨の繰り返し

クラスC 8例	クラスD 7例
5例とも、読者が簡単に予測でき強調にならない場合。他の1例は、自己の作文構成が整えられていないので、同じ内容を繰り返し循環させた例。	総論と人、抽象語と具体語、名詞と動詞、類義語同士の、言い換えなどの関係で同趣旨を繰り返す。

表12 対比的思考による誤謬

クラス	文例	誤謬ジャンル
クラスC	デパートなどの大型店のように時代の波にうまく乗ったものは生き残り、小さな店のような波に乗り切れないものは、立ち去らなければならないとなった。	社会的解釈
	J大学の学生が増加したことにより、昔のままの商店街自体も新しい時代には必要とされなかった。	不適切表現
	…都市部の土地の価格がはね上がり、郊外の土地の価格がとても安くなっていくという地価の高騰化が起っていた。	社会的解釈
	昔の商店街が自給自足で、商店街の外から来る客相手の懐中を目当てに商売しているのではないのに対して、今の商店街というのは、外からやってくる客の懐中を当てにしないと言っていけないというところが見える商店になっている。	問題の繰り返し
クラスD	田舎の人々は集団就職や出稼ぎで、軒並み都会へ移ってしまった。逆に元々都会に住んでいた人は、その住んでいた土地が経済的成長により爆発的に価値が上がり、都会から離れた場所に引越す人が多くなり、…	社会的解釈

表13 ある語句を伴うことによる理由の欠如

クラス	文例	誤謬ジャンル
クラスC	それは、高度経済成長が原因で、地下(地価)の高騰や土地売却をする人が増えたからである。	社会的解釈
	そして社会面では当時の社会背景として、高度経済成長による地価の高騰がおこった。そのため…	社会的解釈
	そしてその時代のニーズに合わせ、昔の商店街から繁華街へと変遷していったのである。	あいまい表現
	急速な時代の変化についていけなくなってしまったために、昔からの店はなくなっている。	あいまい表現
	客がいなければ暮らしが成り立たない商店街になって、それは高度経済成長も含めて、時代の流れのためである。	あいまい表現
	学生がどんどん入ってきて、経済がその人たちにあわせるかのようにもともとの店などが減っていった。	社会的解釈
	しかし、土地の値が高度経済成長の影響などではね上がり、新道に住んでいた人々は土地を売り、郊外へと出ていったのである。	社会的解釈
	それまでであった店なども時代のニーズに合わせ、食べ物屋やそれらに姿を変えた。	あいまい表現
	新道も高度経済成長によって、地価が上がりました	社会的解釈
クラスD	やがて、そのような(朝鮮戦争をきっかけとした景気)時代の流れはこの新道商店街にもおし寄せて来た。商店街の周囲に大会社のビル・J大学などが建った。	社会的認識
	このような高度経済成長によって、豆腐屋やガラス屋やお惣菜屋やビリアルド屋など、たいいの日用品が揃い、そこに住む人たちだけを相手に暮らしが成り立ち、生活があり、自足して自給みなぎる商店街だった。	本文解釈
	「国民所得倍増計画」により進学率が高くなった。	社会的解釈

表14 情報資料の内容、自他の論理を機械的に当てはめた例(10人11例)

クラス	文例	誤謬のジャンル
クラスC	…経済構造は農業、軽工業から重工業、サービス業へと変わっていったために商店街に入ってくる店は食べ物屋や飲み屋や喫茶店などのサービス業関連がほとんどになってしまい、…	社会的認識
	歌舞伎役者の大和屋も伝統を切り捨てた成長背景によって消えていくことになる。	本文解釈
	まず、生活面でいえば、着物・もんぺ・軍服からスーツ・ネクタイ・スカートへ、、ちやぶ台でご飯と味噌汁からテーブルでのパン・牛乳・インスタント食品へ、木造住宅・長屋から団地・マンションへと、衣食住のほとんどが現代風になってきていた。	社会的解釈
	高度経済成長により、日本には大きなビルができたり、いろんな大学などもできていった。そんな高度経済成長の影響が新道商店街の周辺にまで及んだのである。…。そんな中、新道周辺には、J大学や大会社が増え、	社会的認識
	進学に力を入れる親が増えたので、新道商店会の周囲にJ大会の学生が増え。…	社会的認識
クラスD	日本が…大型のスーパーマーケットやデパートなどが多く進出し始めた。そのため、商店街の構成が変化して、お惣菜屋や豆腐屋などといったものはスーパーや食堂、レストランなどに変わっていった。	本文解釈
	又、東京ディズニーランドなどのテーマパークが建てられて、…。	社会的認識
	…ピリヤード屋も同じように、テーマパークに客を取られ、…。そして、外食することが流行したため、新道商店街にも、飲み屋・食べ物屋・喫茶店などが増えていった。	社会的認識
	娯楽施設も例外ではない。…よりよい娯楽を求めるようになった。その結果コンピュータゲームが改竄されゲームセンターができた。なので、昔あったピリヤード屋などもあまりされなくなり、…。	本文解釈
	なので外からやって来る客の懐中をあてにしなければならなくなった。しかしそのためには今まで通りではいけない。なぜならば世間は新しい物を求めているからである。	本文解釈
	しかし、今では、着物・もんぺ・軍服からスーツ・ネクタイ・スカートへ、ちやぶ台でご飯と味噌汁からテーブルでパン・牛乳・インスタント食品へ、…	社会的解釈

合に機械的に当てはめた誤謬一例がある。11例あった。表14参照。
次に、作文がどれだけ内容的に整っているかも問題になる。そこで、小論文課題に必要と思われるキーワード概念、すなわちアイデアとい

うものを考えてみた。そして予備テストと本番テストにおいて、作文の内容を満足させる構成要素、すなわちアイデアがどれほど増加しているかを調べてみた。

表15 アイデアの変化

項目	クラスと内訳等		初めと後の差
	2クラス 初め	77人中 後	
A 高度経済成長、成長率、GNP、国民所得倍増、新製品、技術革新、モータリゼーション、賞金、三種の神器	37	68	31
B 大学、J大学、J学生、学生、進学率	13	43	30
C 大会社のビル、大企業のビル、ビル、高層ビル、サラリーマン、会社の人々、(就職)	20	36	16
D 地価	47	42	-5
E スーパーマーケット、流通革命	3	23	20
F 産業構造の変化、経済構造、産業構造の高度化	0	4	4
G ドーナツ現象、駅につながるメインストリート、駅前に店を構える、人口の空洞化、駅前という場所柄	0	10	10
H 都市化、都市の過密化、人口集中、都市部開発、人口増加、都市集中	2	13	11
I ナインの職業、後継者の問題、就職率、子供たちが実家の職業を継がない	3	8	5
計	125	247	122

アイデアに相当するものを全解答の記述からピックアップアップし、同じ概念レベルとして並べられるもの同士を、同じ枠内に入れてまとめてみた。それぞれの枠内の一個ないし数個のアイデアを使えば、作文は内容的に十分なものになると思われる。

表15は、そうしたアイデア群であって、予備調査と本文テストと

の増減をまとめたものである。アイデア数が1項目だけ減少しているものがあつたが、他は平均して約2倍に増えている。構成要素が増加したとは言え、ギクシャクしていて、文の質の高さ、流暢さとは一致しないが、資料を参考にした強みが表れている。

以上の分析結果は、生徒にもフィードバックされなければ何の意味もない。テストを採点して返却した際、コメントを付けてあるが、夏休み明けに、生徒一人一人に分析結果や個人評価を渡してある。その方法は後で述べる。

5 考察

昨年度は、一昨年度の反省に立ち、同單元内のもう一つの小説指導の時間を割き、本文読解に時間をかけ、複数の参考資料を読ませたし、予備テストをして事前に本文理解を確認させ、文案を考えさせた。本文解釈の誤謬は昨年度より少なくなっているが、漢字の誤りは昨年度より著しく、歴史的社会的認識の誤謬と作文表記上の誤謬傾向もかえって増大（と言うよりあいかわらず存在すると言った方が適切であるが）していた。次に、分析結果を考察し、解決の道を探り、理論の発見を試みる。

(1) 本文解釈の誤謬例から

本文をしつかり読み込んでいないこともあるが、本文理解があいまいであるとき、学習者が簡単に描きうるイメージやなじみのあるイメージ（例えば都会における大会社のビルの並んでいる様子、大

学の建物、一流デパート、大型スーパー、ゲームセンターなどが働き、その作用を受ける場合がある。わずか百メートル足らずの駅前商店街にそうしたイメージをダブらせてしまうことがある。本文読解の際、本文に沿った適切なイメージを持たせるようにしなければならない。読解とイメージとの関連を図ることである。

(2) 社会的歴史的認識の誤謬例から

社会的歴史的な認識の誤謬は、自分の生きる時代や環境の反映であつたり、情報資料の理解が不足していたり、資料の記述や自他の論理をそのまま新道商店街の場合に当てはめてしまつたり、変遷理由をきちんと考えなかつたりしたところから生じている。

同時代の存在物、土地高騰の理由、飲食店街への変化の理由、そうした誤謬が多かつたが、それをなくすために、本文解釈の際、時代推定、土地高騰理由、飲食店街への変化など、誤りやすい理由を尋ねる問いを、設定しておくべきであつた。

課題を与えて資料を探し調査する段階で、時代の推定に留意させていた。しかし、本文解釈の際、本文の時代に該当しないパブルやコンビニやデイズニールランドやＩＴなど、学習者の抱きやすいイメージを取り上げ、本文場面の時期と比較しておくことにしたい。

歴史的認識を高めるためには、学習者の持っているイメージや知識を確認し、その歴史的位置付けをしっかりとさせた後に情報資料を眺ませるべきであつた。

(3) 表現上の誤謬例から

昨年度の考査は、文案を家庭でノートに書いてこさせたが、漢字をあらかじめ辞書で確認しさえしていれば、誤字の問題は起こり得なかつたはずである。本番テストであつてもそうしていなかつた。

学年が違うが、昨年、2年生のクラスで、漢和辞典を全員に買うように指示し、現代文の小説単元「山月記」のところで漢字を調べさせてみたが、最後まで辞書を買ってくれない生徒が約四割存在した。金銭的な問題ではなく、辞書をそろえることに価値を持たないのである。グループ別に辞書を引かせてみると(グループ内に誰も辞書を持たなかつたグループも存在したが)、辞書に書かれている内容の読み取り能力が不足していた。辞書で調べることに生徒は抵抗感を持つている。授業であまりやらないので、習慣化していないし、辞書の記述内容の読解力も不足している。

3年生も事情は同じである。漢字を辞書で確かめる習慣がない。授業中携帯電話の辞書機能を利用しているのを見る。高校では教科ごとに参考書を多く持たせているが、参考資料の記述内容の理解も不足している。古典の教科書の脚注が読めない生徒も存在する。調べることの習慣化は重大な課題である。

漢字以外の表記上の問題を述べる。

表記上の誤謬で、不適切な用語や表現が多い。

「不適切用語」については、本文指導によって解消されるものがある。本文の用語の不適切な使用例が30例中14例あり、ほぼ半数あつた。本文の用語の使用意図を押さえさせるべきであつた。本文で

特殊な意味を付加しているか、比喩なのか、擬人法のかなど、どういう使用なのかを理解させればよい。

一方、「不適切表現」を詳細に調べると、類似する二つの物事を区別しなければならぬところを混同させて、文という枠内での物事の混同ミスである。

また、表現とは言葉の選択である。物事の類似から言葉が的確に選択できずに表記を誤ったとも解釈できる。物事概念形成、判別が要求される。

解答作文は考查の形を取っている。欠点を見られたくないという思いで、あいまいさや冗漫な表現でばかしたとも考えられる。

書くことの機会を増やし、問いを發しては短い文を書かせるとよいのではないか。書くことによつて考え方が明瞭になるし、短い文であれば、一文の不備、文法上の誤謬など、個々に指摘しやすい。

(4) その他の観点から

「対比的思考による誤謬」は、切迫した状況の中で、文を引き伸ばすために対比的に文章を展開しようとするところに生じた誤解であろう。昨年度は、ノート持ち込みが可能だったので、余裕が生まれ少なくなったものと考えられる。しかしながら、対比的思考は、生徒が好んで取りやすい思考様式と思われるので、注目したい。

「高度経済成長」、「時代」などといった言葉を伴うことによる理由の欠如であるが、相手に判断をゆだねてしまう思考の短絡である。用語や概念に支配され、そこからの過程を考えずに別な事柄を安易

に結びつけてしまい、社会的歴史的認識の誤謬であったり、本文解釈の誤謬であったり、あいまいな表現であったりする。さほど調査していなければ、言葉を冠しただけの文で終わってしまうであろう。

理由を考えることに不得意な生徒が多く存在する。授業において選択肢をあらかじめ作ってくれていることが多く、自分自身で考えてみようとする機会が少ないのではないかと思われる。論理思考力養成のためにも、理由を書かせ、考えさせるのがよいと思われる。それに関連して、情報収集の大切さも知らせなければならない。

情報資料の記述や自他の論理を、本文の場合にそのまま当てはめた誤謬例がある。主に情報資料引用上、論理展開上のミスで、参考文献と本文双方の理解、関連づけが要求される。

以上のように、昨年度はあらかじめノートに書いてこさせたにもかかわらず、かえって誤謬が著しく見える。漢字能力、読解能力、論理思考力、作文力、調べ学習や情報資料引用のスキルなど、クリアしなければならぬ問題点が多く潜んでいる。

クラスDを1時間だけ図書館へ連れていったが、結果は惨めなものであった。図版や写真の多い参考資料を選んで、グループ毎に分けてやり、ワークシートをもとにただちに調べ作業にかかれるようにしてやったが、活動が円滑にいかなかった。一部の生徒を除き、時間が無為に過ぎてしまった。何をどのように引用してよいのか分からなかった。また、それは、普段の学習活動と相反する活動であったためでもある。スムーズに活動していた生徒は、弁論部、J

RC、百人一首クラブ、生徒会役員など、これまで多面的に活動してきた生徒で、調べごと体験がこれまでにあった生徒である。

資料は、文章よりも、写真の方が生徒にとってより分かりにくいらしい。単に絵図・写真の情報量が多いということではない。写真は、学習者にとって手がかりのつかみにくい情報量が多すぎて、参考にならなかったのである。絵図・写真の解釈は、かえって知識を経験とを伴う。指導者が十分指導してやらなければ有意味にならない。絵図・写真は、安易な提示ができない性格を有する。

以上、漢字能力、調べ学習、読解能力、論理思考、作文力の問題などを述べた。その方策を抜き出すと、次のようになる。

- ・本文解釈の際、本文に沿って適切なイメージを持たせる。読解とイメージとの関連を図る。

- ・本文解釈の際、時代推定、土地高騰の理由、飲食店街への変化など、誤りやすい理由を尋ねる問いを設定しておく。

- ・本文解釈の際、特に本文の時代に該当しないパブルやコンビニやデイズニールランドやITなど、学習者になじみのあるイメージを取り上げ、本文場面の時期と比較させる。

- ・歴史的認識を高めるために、学習者の持っているイメージや知識を確認し、その歴史的位置付けを明瞭にさせた後に情報資料を読ませる。

- ・辞書で調べる習慣をつけさせ、辞書の記述内容を理解させる。

- ・本文の用語の使用意図を押さえさせる。本文での特殊な意味、比喩、擬人法など、使用法を理解させる。

- ・類似する二つの物事の概念を持たせ、的確に言葉を選択させる。書くことの機会を増やし、問いを発しては短い文を書かせる。

- ・対比的思考は、生徒が取りやすい思考様式であるが、機械的に操作し過つことがあるので、現実との関連を図る。

- ・論理思考力養成のため、理由を考えさせ書かせ、関連して情報収集の大切さを教える。

- ・調べごとの機会を作り、参考資料を読ませて理解させる。
- ・ポイントを絞った調べ学習をさせる。

- ・絵図・写真は、理解の手がかりを見つけることが困難であるので、教師の適切な支援がいる。

今後、さらに適切な方法で実践してみても、判断命題の形にしておかなければならない。

どのような指導にも限界がつきまとうている。一過性の指導に終わる危惧である。読む、書く、調べるという三つの活動は、学習習慣の問題でもある。学習者自身の主体性、学習習慣を確立させるための体制や環境も必要になってくる。

アカウンタービリティ (Accountability) という言葉があるが、これを一般に「説明責任」と訳しているが、これは、「努力義務」と訳すべきである。管理者も教師も生徒も保護者も、監督庁も学校も

家庭も地域共同体も、それぞれ「努力義務」が具体的に示され、同じ教育目標、すなわち学力の向上を目指して、社会全体が義務を果たして連携しなければ、学習習慣が確立しないのではないかと。指導者の枠からはるかに外れるが、教育環境の問題で、そうした理論にもたどり着く。

6 評価とフィードバック

生徒にテスト解答の作文を返した際、コメントを加えて返してある。また、夏休み明けに、生徒一人一人に前述の分析結果や個人別評価をフィードバックしてある。

作文評価の際、考慮した項目は、「課題理解（主題）、本文理解、アイデア、社会的歴史的認識、情報資料の適用、文章・論理の展開、関連性、作文のスキル（段落、文章の一貫性、表現方法）」といったものであったが、要約すると、課題性、関連性、論理性、内容、表現の五つであって、それぞれの定義は表16の通りである。

次に生徒個々へフィードバックした方法を述べる。

評価したものをそっくりフィードバックするには、個々の作文の分析データ（マイクロソフト社のエクセルを使用）があるので、ルックアップ関数を使用し、シート上の横系列の分析データを別なシートの個人カードにそれぞれ移動させる。それなら負担が軽くて生徒個々に配布できる。ただし、多少記述を手直した。研究分析の記述は、指導者個人のものであるから、学習者に対して適当でない

表16 評価する際、考慮した事柄

項目	説明	関連項目
課題性	課題の趣旨を理解し、何を答えるべきか、そのためには何を調べたらよいか、何を書くべきかが反映されていること。	主題理解、時代設定、表現の方向付け、アイデア構想
関連性	内容・事柄相互の類似や関係を明らかにして互いにつながっていること。	引用、展開、階層化とシステム化
論理性	事柄、原因・理由、関係などが明示され、文の展開が納得でき、筋が通っていること。	思考力、論理力、具体理由、社会認識
内容	課題を満たすための内容・事柄・アイデアが整い、合理的に事柄が明示されていて、字数が充足していること。	アイデア、表現結果としての合理的な内容、字数の充足
表現	文の隅々まで課題や趣旨が一貫していてまとまっていること。	スキル、一貫性
	段落構成を取り、各段落ごとにまとまり、互いに関連していること。	スキル、段落意識
	言葉の規則にかなない、内容、語句、語彙の記述が的確であること。	個々の表現

こともある。

この方法は、授業中、生徒個々に異なる内容を一斉に提示する場合に広く活用できる。

今後の課題

結論として導き出されたものは、今後、適切な方法を取って実践し、誰でも使用できる判断命題の形にしなければならない。

また、よりいっそう個人に目を向け、個々の文脈的な観察と考察によって新しい知見を求めたい。

さらにまた、読む、書く、調べるといった活動が習慣化するよう、

一貫した授業のあり方を工夫しなければならない。

そうした点で、まだ不十分であると思っている。

《参考文献》

- 輝峻淑子『豊かさとは何か』(岩波書店) 1989
橋本寿朗『戦後の日本経済』(岩波書店) 1995
ペスタロッツィ『隠者の夕暮れ、福島政雄訳』(角川文庫) 1970
高木貞敬『脳を育てる』(岩波書店) 1996
北川敏男『情報学の論理』(講談社文庫) 1969
中村雄二郎『臨床の知』(岩波書店) 1992
藤岡喜愛『イメージその全体像を考える』(日本放送出版協会) 1983
西之園晴夫『授業の過程』(第一法規出版) 1981
E・D・ガニエ『学習指導と認知心理学』、赤堀侃司・岸学監訳(パーソナルメディア株式会社) 1989
バリー・サンダース『本が死ぬところ暴力が生まれる』、杉本卓訳(新曜社) 1998

ステイブ・クラッセン『読書はパワー』、長倉美恵子・黒澤浩・塚原博訳(金の星社) 1996

平山満義編『質的研究法による授業研究』(北大路書房) 1997

ウヴェ・フリック『質的研究入門(人間の科学)のための方法論』、小田博志・

山本則子・春日常・宮地尚子訳(春秋社) 2002